特別インタビュー

ヤマヤ物産有限会社 取締役社長 山本 修一 × 東京都葛飾福祉工場

※敬称略

「まかないくん」の基本的なスタンスは、「実働現場主義」です。

豚汁一杯。この一杯がどんなに重要か。

1 ヤマヤ物産有限会社・事業概要

昭和23年3月、前田藩が作った鋳物の町　富山県高岡市で籾殻カマドの販売店として山本商店を創業しました。鋳物製品の販売、鋳物風呂釜・住宅設備器材の卸販売・メンテナンス・工事なども手がけました。

2 カマド事業への参入

阪神淡路大震災の時に炊き出しに行ったのがこの事業の始まりです。被災地の状況をテレビで見て大きなショックを受けました。「行かなければいけない」そんな思いで、近隣の有志10名と行きました。交通許可が下りるのに時間を要すなど、到着できたのは発災後10日目でした。小学校・中学校を回って約3,000食を提供しました。入ったのは神戸の中央に位置する兵庫区でしたが、最初の救援物資がようやく届いたのも、私達の到着の2日前とのことでした。ですから炊き出しは私達が一番早かったようです。それでも私達に「来るならもっと早く来てくれ三日間は地獄であった」という言葉が投げかけられました。その言葉には「食べられない・寒い・苦しい。なぜ早く来ない!」という思いがあったように感じます。避難所では亡くなられた方々も多かったのではと推察しました。真冬1月の寒い厳しい状況での豚汁一杯。この一杯がどんなに重要か。命をつなぐか。炊き出しの重要性をひしひしと感じました。炊き出し器の配備は是非とも日本中に広める必要があり、日本で唯一のカマド知識を持っていると自負している私自身の責任として、この事業へ参入することを決意しました。この経験は炊き出し器を作るうえでの大きな礎となりました。

3 「まかないくん」の開発

阪神淡路大震災の時に持参したカマドは、直径60㎝の羽釜3台と直径1mのカマド1台。この時の60㎝の羽釜が「まかないくん」の前身となりました。
阪神淡路大震災の時の現場の教訓として、大量に炊き出しをしなければならない時は、大量に調理できるカマドでないとダメだということが分かりました。別の現場では、ほかの団体が小さなカマドを10個使っていました。そうなると10個のカマドすべての面倒を見なければなりません。安全管理もしなければならない。それは大変なことでした。大きなカマドの必要性を感じました。阪神淡路大震災の炊き出しから帰ってすぐに、開発に着手しました。最初は先行メーカーのカマドも参考に試作しました。しかし、あるカマドでは下のアスファルトが丸く焦げたり、また断熱材を付けたら暖かいので、犬が寝転んだりして使い物にはなりませんでした。とにかく先人の知恵を尋ねるのもよいのですが、独自に考え研究しました。そしてまずカマドの条件を大量調理・安全・衛生・組立収納・設置場所と決めました。その時のカマドの条件は今も大きくは変わっていません。また、当時の東京都葛飾福祉工場の部長から、『東京は収納場所が問題。大きく使えて小さく収納できるものを』と要望されましたので現在の85型の上部を反転させる構造はまさにこのアドバイスがきっかけなのです。

ヤマヤ物産有限会社 山本 修一

実際に被災地で使ってみると、カマドを含めた全体を見る必要が出てきました。つまりカマドを使うには炊き出しシステムが必要なのです。使う人、調理技術・周辺ハードとして水道ポンプ・流し台・調理機材など十分機能できるようにその環境も整える必要があるということを学びました。こういった知識習得には被災地へ行くことが第一なのです。しかも行くには食の重要性から発災直後に行くことが重要なのです。災害ボランティアも先に駆け付けていますので、彼らにも協力してもらって炊き出しをするようになりました。

4 「まかないくん」の特徴

最初は満水120ℓ（調理量100ℓ）で作りました。当初、一般財団法人日本ガス機器検査協会（JIA）で検査をして頂きLPガス専用でし

た。現在は燃料入手が容易な灯油バーナーの注文も多いのですが、基本燃料として薪を安全に使えるようにしました。大きさも85型（満量120ℓ）の他に、50型（満量60ℓ）30型（満量38ℓ）があります。開発当初から安全を優先し、または災害時の燃料が枯渇した教訓がありますので、燃料の節約・効率化を高め、ダイオキシン問題に対応すべく許容CO値・完全燃焼に努めました。当時の炊き出し器は側面だけで底面はありませんでした。そのため炊き出しは炎や熱で地面を焼かないよう、学校のグランドなどで行いました。近年、防災訓練などに参加しますと、地面に水をかけながら炊き出しをやっている光景を見ますが、濡れた地面の上では水蒸気が発生してしまい、熱効率が悪くなります。

「まかないくん」は底面を3層構造にすることで、下に熱が行かないのでアスファルト上でも使用でき、東日本大震災などでは木の床の上で3ヶ月間も使用されたことがありました。キャスターを付けているので要求の高い移動も可能になっています。

外への放熱を防ぐことで、かまどに近づいて作業をすることができ、限られた燃料で高い熱効率の炊き出しができます。また、煙や火の粉が外部へ漏れ出さないよう工夫した安全な構造です。

こういったことは被災地や訓練に行って、使用してみて初めて分かることです。人々はどのように使っているか？ 危険はないか？ 問題はないか？ など、現場へ行くといろいろ勉強になります。人々から教わることも多々あります。

5 「まかないくん」の役割

まずは「まかないくん」を備蓄し「持っている」ということが重要です。そして平時からどんどん使っていただくことをお願いしたいです。お祭りや学校・町会などの行事や各種イベントなど、使うことによって、器材に慣れることはもちろん、人と人との繋がりが出来ます。絆が深まります。こういった人の和が災害時の共助には最も大切なことになります。災害に強い人づくり町づくりにもつながるのです。

災害時では、温かい飲食物で、心と体を癒すだけでなく、低体温症から体を守ります。煮沸消毒で安全な水を手に入れられます。災害時でも日常と近いものが食べられることが可能となります。

6 ヤマヤの今後

「まかないくん」の基本的なスタンスは、「実働現場主義」です。実際に災害現場へ赴き、被災者さんたちと作り上げていくことをモットーに商品開発に取り組んでいます。現場での活動ノウハウが徐々に出来つつあります。しかし、あらゆるノウハウが蓄積される中で「これで大丈夫」というラインが見えないのも事実です。一回一回の災害が見せる景色に同じものはありません。安易に「想定外」と言ってしまいたくなるシチュエーションもあります。それでも、安易に流されない会社でありたい。そう思い自分づくり（商品づくり）に勤しんでまいります。

7 インタビューを終えて

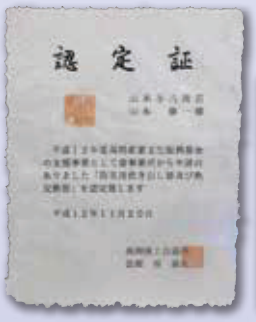
『「まかないくん」が全国に配備されれば、私が災害時にカマドを持参して炊き出しをする必要はなくなる。だから葛飾さん、どんどん売ってくれ!』彼は笑顔でプレッシャーをかけてきました。

もしそれが実際に叶ったとしても、たぶん彼は被災地へ真っ先に出向くと思う。彼は責任感が強い。志が高い。そして少々押しが強い。

『私共の行動は、ボランティアというか現場主義。商品開発のために現場に行っている。普通のボランティアとは違い、少ししたたかかも知れません。』そう彼は自嘲気味に語っていた。たぶん本音は違う。商品開発だけが目的ではない。彼は元来、優しいのだ。

写真上：熊本地震や胆振東部地震での炊き出し

写真下：高岡産業文化振興基金の認定証と神戸市長からの感謝の手紙



まかないくん85型（P72）